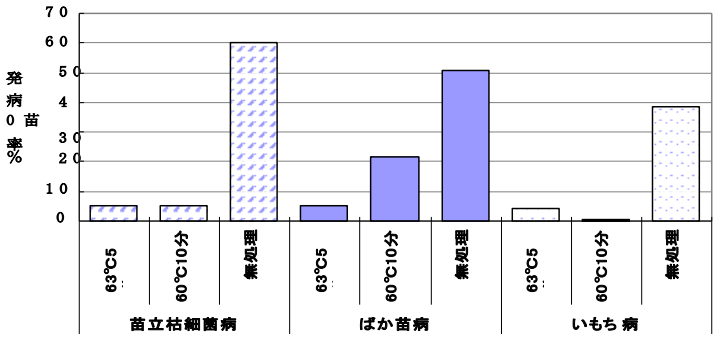
３）物理的防除法

（１）温湯浸漬法によるイネ主要種子伝染性病害の同時防除

水稲種子の 60℃10 分間あるいは 63℃５分間の温湯浸漬法によって、ばか苗病、苗立枯細菌病、いもち病の種子伝染性病害の同時防除が可能である。



温湯浸漬処理による種子伝染性病害の防除効果

（２）具体的技術

イ）温湯浸漬は塩水選後１時間以内、または充分に再乾燥させた後に、浸種前の種子をネットに入れて行う。防除効果の低下を防ぐためネットの１/２量を目安に袋詰めをする。

ロ）温湯は 60℃あるいは 63℃を保ち、正確に 10 分あるいは５分間浸漬する。浸漬直後に種子を２～３回上下にゆすり、ネットの中心部まですばやく温度が上昇するようにする。

ハ）浸漬後は速やかに流水で冷やす。

大規模温湯殺菌装置

温湯殺菌装置付催芽機

（３）留意点

イ）温湯殺菌装置付催芽機を利用しない場合は、温湯の低下を防ぐために、種籾に対する湯の割合（浴比）を１：10 以上にしたり、熱伝導率の低いプラスチックなどの容器を使用する。容器にフタをすると効果的である。

ロ）ササニシキ、ヒメノモチ、蔵の華については、浸漬時間が５分間を超えると発芽率が急激に低下するおそれがあるので浸漬時間を厳守する。

ハ）吸水した種子、穂発芽した種子については発芽障害を起こすおそれがあるので使用しない。

ニ）割れ籾は温湯消毒の影響を受けやすく、割籾混入割合の高い種子は発芽率の低下が懸念されるため、割れ籾の混入割合の低い種子を使用するか、種子消毒剤による消毒法を行う。

ホ）60℃、10 分間の浸漬処理は、ばか苗病に対する防除効果がやや劣るので、ばか苗病の発生が心配な場合は63 ℃５分で温湯処理を実施する。